

Title	ウズベク民族とポストソ連社会
Author(s)	高橋, 巖根
Citation	年報人間科学. 20-1 p.163-p.175
Issue Date	1999
oaire:version	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/10273
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

ウズベク民族とポストソ連社会

高橋
巖根

〈要旨〉

本論文は、ウズベク民族に関するイデオロギーと地域主義が同国の政治・経済に与える影響をテーマに採り上げている。第1節では基礎知識として、1924年の中央アジアの国境線確定を境とした政治的区分及び民族構成の歴史を簡単に振り返る。第2節では、旧ソ連の研究者が創り上げた民族イデオロギーを西側の研究者の見解と比較し、さらに地域主義に言及しながら、その特質を探る。第3節では、イデオロギーと地域主義がウズベクの政治・経済にどのような特徴を与えているかを検討する。

キーワード

ウズベク民族イデオロギー、サルト、地域主義、歴史、遊牧ウズベク族

筆者は1996年4月より1998年3月までの2年間、在ウズベキスタン日本国大使館の専門調査員として同国の首都タシケントに滞在した。また、これに先立つ1995年11・12月及び大使館勤務後の1998年8・10月の計約3ヶ月間個人的な調査の形でも同地に滞在している。合計2年3ヶ月のウズベキスタンでの滞在経験を通じて最も印象的であったのは、同国の主要民族であるウズベク人に見られる独特な民族性がソ連的な社会のあり方と微妙な関係を保ちつつも一体となっていることであった。このことは、通常市場経済への移行が至上命題とされる旧ソ連社会の行方を考察する上で重要な点であると思われる。そこで、本論文では、まず今世紀前半までのウズベク人（及びそれと密接な歴史的関係をもつ民族として、タジク人）の民族的形成の過程を辿り、その上でそうした形成のもつある種の不十分さを指摘しながら、それがソ連時代の負の遺産として独立後のウズベキスタンの政治・経済に微妙な影響を及ぼしている状況について論じてみたい。

1. 独立後のウズベキスタン及び旧ソ連中央アジア諸国

ウズベキスタンを含む旧ソ連中央アジア地域については、同地域はごく最近まで日本人には馴染みの薄い地域であり、また現在でも日本人の研究者は限られた分野でしか研究を行っておらず、基本的な情報が普及していないと思われる。そこで、まず最初に、同地域について特に民族・歴史を中心に簡単に概観してみたい。

現在の5つの独立共和国（地理的にロシアに近い方から、カザフスタン、キルギスタン、ウズベキスタン、トルクメニスタン、タジキスタンの5ヶ国）の形成について、大きな歴史的分岐点となったのは1924年の「国境線確定」と呼ばれる政策であったと言われる。この政策に関しては資料が不足しており明確なことは不明だが、国境線確定とそれによる5つ（厳密に言えば、この年の時点では4つ。タジキスタンはまず、ウズベキスタンの中の自治共和国として形成され、1929年に共和国に昇格した）の社会主義共和国の形成はこの年いっばいかけて、モスクワ中央と中央アジアの指導者たちの複雑な交渉を通じて実現している。レーニンはこの年に亡くなっているのだ、おそらくモクスワ中央においてはスターリンがイニシアチヴをとったものと推定され、1940年代に至るまでの共和国の政治的・イデオロギー的形成においては彼の民族に関する理論が大きな影響を与えたと思われる。

1924年のこの政策以前の段階では、中央アジアには領域的にも政体から言っても全く異なる種類の政治的区分が存在した。19世紀前半の時点では、現在のウズベキスタン、キルギスタン及びタジキスタンの西部には、遊牧ウズベク族の出自を持つ世襲的な権力者ハーン乃至アミール（ブハラの場合）を中心とした封建的な3つの小国家が存在し、特にお互いの境界となる地域をめぐって長年にわたる対立を続けていた。

最西のヒヴァ・ハーン国はアラル海に注ぐアマダリヤ下流のヒヴァを首都とする国家で、歴史的にはホレズムと呼ばれた地方であり、

北のキプチャク草原（現在のカザフスタンからウクライナ南部に至る草原地域）及びロシアと南のカラ・クーム砂漠のトルクメン地域及びイランとの関係が深く、また内部の民族構成を見ても支配民族であったウズベク族以外にも遊牧の伝統の濃い民族であるトルクメン、カラカルバック、カザフなどを含む多民族国家であった（この状況は、政治的にはウズベク領とトルクメン領に分かれた現在でも変わっていない）。この地域は、後述する2つの国家が分布した東側にある規模の大きいオアシス地域とはキジル・クーム砂漠を挟んで地理的な隔たりがあり、12・3世紀には独自の国家ホレズム・シヤール朝を樹立するなど独自の伝統を誇った。

中央アジアのオアシス地帯の中央に位置するブハラ・アミール国は、その名の通りブハラを首都としサマルカンドを含みタジキスタン西部に至る広大なオアシス地帯を支配した。また、最東のコーカンド・ハーン国はフェルガナ盆地の都市コーカンドを首都として同盆地とタシケント地方、トウルケスタン地方（現カザフ領）、現キルギスタン領を含む地域を領土とし、ゴルノ・バダフシヤン地方（タジク東部）とカシユガル地方（現中国領）にも政治的影響を及ぼした。この2つの国家の民族的構成については後に詳述するが、フェルガナ盆地やサマルカンド、ブハラなどのザラフシヤン流域に集中して住む「サルト」と呼ばれた定住農耕・商業民と山裾や砂漠近くのステップなどで遊牧・半遊牧生活を送る本来の意味での「遊牧」ウズベク」の2者を主要な構成民族として、周縁地域にカザフ、キルギスなどの遊牧民やゴルノ・バダフシヤンの山地タジク人、オア

シス定住民のウイグル人などを含んでいた。

さらに、この3ヶ国の北には今日のカザフスタンの大部分を占める草原地帯が、南にはトルクメニスタンとなった砂漠地帯が広がっているが、両地域では歴史的に強力な政体が出現したことはごく稀であった。

（以上、言語学的な系統から言えば、カザフ、キルギス、カラカルバック、トルクメン、ウズベク、ウイグルはチュルク（トルコ）系、山地タジク人を含むタジクはイラン系ということになる。）

19世紀に入ると中央アジア地域において、南ウラルから西シベリアにかけて要塞を築いたロシア帝国がまずカザフ草原を自己の影響下に置いた後、それを足掛かりにこの世紀の中葉から後半にかけて南部地域を併合乃至影響下に置いた。コーカンド・ハーン国は滅亡させられてロシアの領土となり、残る2つの国家はロシアの保護国となり間接的ながら特に近代化の面でロシアの影響を受けることになる。帝政時代、この2国とカザフ草原を除く中央アジア南部はトルキスタンと呼ばれた。ロシア革命後の1920年、ヒヴァ、ブハラの両国では世襲の首長が廃位され、それぞれ領土の変更なしに形式的に社会主義共和国とされた。同時期、トルキスタン領も社会主義共和国とされていたから、新しく社会主義の名称を冠しながらもこの地域の政治的区分にはまた変更が為されていなかった。

その後1924年に国境線確定が実行されるわけだが、その後も1929年のタジキスタンの共和国昇格を含め、いくつかの小規模な境界線変更が行われているものの、中央アジアを5つの主要民族

によって分けるといふ基本的な形は一貫して維持され、1991年のソ連邦崩壊に伴いその形に沿って各国の独立が遂行された。

2. ウズベク人の民族的形成

ウズベク人の民族的形成について語る場合、旧ソ連の他の諸民族の場合と同様、イデオロギーにまつわる困難な問題がある。容易に予想されるように、旧ソ連の民族に関するイデオロギーが実際の歴史を必ずしも反映していないだけでなく、さらに問題を複雑にしている要因として、民族イデオロギーの人工性が現在の民族のあり方に大きく影響していることが指摘できる。

後者の点は、同じ旧ソ連地域でも、例えばロシア人に関しては当てはまらない。国民は特定の民族への所属を超えたホモ・ソヴィエティクスであるべしという、ソ連体制が（他の諸民族に対するのと同様）ロシア人に対して押し付けたイデオロギー的な不幸は、一度体制が崩壊すれば、例え時間がかかるにしても解消に向かう性質のものである。確かにロシア社会は混乱しているが、ロシア正教は息を吹き返し表面に現れているし、ロシアの伝統や文学について語ることに何等制限はなく、ジリノフスキーのようにプリマコフの首相指名に際して自ら率いる党の機関紙の見出しで「ロシアを抹殺するなどわれわれが許さん」と叫ぶことすらできる。しかし、中央アジアに関しては事情が全く異なり、民族イデオロギーの人工性は中央アジアでロシアのような（肯定的な意味でも否定的な意味でも）自

由な社会が実現するのを押し留める要因の一つとなっている。

それでは、中央アジア民族の人工性とは何なのか。それを見るために、ここでは旧ソ連の民族誌学（ロシア語で「エトノグラフィーヤ」。西側の「文化人類学」に相当する学問だが、理論や関心はかなり異なる）が語るウズベク人の民族性と西側の研究者の代表としてソ連の民族問題の研究者として知られるアメリカのE. オールワースの見解（Allworth 1990）を比較してみることにする。

ウズベキスタンに関する民族誌学において、ウズベク人の民族性に関する理論構築を行ったのは奇妙なことにウズベク人の研究者ではなかった。この問題に関する重要な著作は、ジャディードと呼ばれる中央アジア出身の知識人たちの大半が1938年の粛清によって消えた後、まず1941年にロシア人のA. ヤクーボフスキーが「ウズベク国民の民族的形成（エトノゲネシ）の問題に向けて」（Yakubovskii 1941）を発表して方向付けを行い、キルギス生まれのタジク人M. ヴァツハーポフがものした1961年の「社会主義的ウズベク民族の形成」（Yakubov 1961）によって理論的に整理され、定式化されたといつてよい。

ヤクーボフスキーは1941年の論文で、それまでソ連の研究者が考えてきたように（そして後述の如く、現在でも西側の学者が妥当と見なすように）中央アジアにおけるウズベク人の歴史はシャイバニ・ハーンが今日のウズベキスタン地域に進出した16世紀に始まるのではなく、それを遡る遙かな古代からウズベク人の祖先であるチュルク系民族の足跡はこの地に残されており、古代より連綿と

続くこの人々が遊牧民族出身の一部族である「ウズベク」から民族名を借りたに過ぎないと主張した。オールワースは、ヤクーボフスキーがロシア人であることに注目して、「タタールのくびき」という言葉に象徴されるようなモンゴル・チュルク系の遊牧民に歴史的に苦渋をなめさせられてきた自民族の心理がここに投影されたのではないかという感想をもらしている。いずれにせよ、彼の見解は40年代を通じてウズベク民族に関するイデオロギー形成に大きな役割を果たし、その成果が1961年のヴァツハーポフの記念碑的著作に結実するのである。

ヴァツハーポフによれば、モンゴロイドの特徴を示す民族が中央アジアに来住するようになったのは実に紀元前6―4世紀の頃であったという。紀元後6世紀中葉、中央アジアは突厥の支配下に入ったことによりモンゴロイドの来住が増え、彼らの定住化も見られるようになり、それに伴って既に定住していたイラン系住民との同化も始まる。11、12世紀頃、チュルク系のカラ・ハーン朝の支配が行われた時代には、チュルク系のイスラム化が進行し、ウズベク民族の「基礎」が形作られることになる。その後13世紀のモンゴルの来襲を経て、15世紀末キプチャク草原からいわゆる遊牧ウズベク族が南下してくるのだが、これがウズベク系民族来住の最後の大きな波と評価されている（小規模な移住はその後も19世紀末あたりまでは見られた）。だが、ウズベク民族が最終的に確立するのは20世紀に入ってからのこととされる。

最後の点は、歴史を振り返ってみれば実は当然のことである。つ

まり、既に見たように、1924年以前の中央アジアには今日のものと領域から見ても政体から言っても全く性格の異なる政治的区分が存在していたのである。当時の状況下で、「ウズベク」と呼ばれていたのは、山裾や砂漠近くの草原で遊牧・半遊牧生活を行っていた人口的には少数の人々にすぎず、人口の多くを占めるオアシス地帯の定住民はチュルク系・イラン系を問わず一括して「サルト」と呼ばれていた。20世紀初め頃に中央アジアの改革派知識人であるジャディードたちの活動が活発化するようになって、少しずつ「トルキスタン人」、「ブハラ人」などといったようなナショナルリズムに基づく民族意識が浸透していったのである。

ヴァツハーポフによればこのような歴史を持つウズベク人は、19世紀末から20世紀初頭の時点での民族構成から見ると3つの層に分かれるとされる。第一の層乃至グループが「サルト」と呼ばれるオアシス定住民であり、今日のウズベキスタンに最も古くから在住してきたと考えられ、その内部に遊牧民のような民族的区別を欠き、生業的には灌漑農業、工芸、商業に従事し、都市や規模の大きな農村に居住している。第二のグループは、彼が「チュルク」と呼ぶチングス・ハーンの来襲以前からの来住者であるが、定住民には同化せずに半遊牧生活を送り、カルルク、バルラスなどといった名で知られる民族的区別を内部に維持している。第三のグループは狭義の「ウズベク」であり、これは16世紀以降に北方から来住した人々だが、既に定住化して農業を営む者も多いが、一部高地や草原などでは全面的な遊牧を行っている者もある。だが、いずれのグループも

言語、物質・精神文化の面では同じ民族とみなし得るほどの共通性を持つとされる。

ウズベク民族を規定する客観的基準の多くはそれに関する研究自体がイデオロギーに沿って行われたため、それを直ちに評価することは難しいが、言語についてはある程度のコメントが可能である。民族同様、ウズベク語もやはり、1920年代から30年代にかけての国家創造の過程の中から生じた。1924年にできた新生ウズベク政府は当初は遊牧的伝統を残したトゥルケスタン及びチムケント地方で話されていた方言を基礎として標準語化を図ろうとしていたが、その後同地方が最終的にカザフスタンの領土となったこともあり、オアシス地帯であるタシケント及びフェルガナ地方の方言を新たに基礎として採用した。このことにより、ウズベク語の特徴は母音調和を持つ他のチュルク系言語から離れ、オアシス地帯の言語であるタジク語により近づいた。この事実が、ウズベク民族イデオロギーにおける「サルト」的要素の最重要視と関連がある可能性も考えられる。

1997年10月20日ウズベキスタンのイスラム・カリモフ大統領はヒヴァ建都2500周年記念式典の演説において「2000年前のローマの歴史家・・・はチュルク系民族の古代における祖先について次のように書いている」と述べた (Karimov 1998) が、今や「チュルク系民族の古代における祖先」がウズベキスタンの公式イデオロギーにおいて何であるのかを理解するのは難しくないだろう。それはソ連時代のイデオロギーと何等変わっていないのである。

1993年2月12日付けの「コムソモールスカヤ・プラウダ」紙のカリモフに対するインタビューは「新しい家が建つまでは古い家を壊すな」と題された (Karimov 1996) が、これはカリモフの漸進的・段階的な改革を表す言葉としてよく言及される。1996年には独立後作られた国家公務員の再教育施設である国家社会建設アカデミーの中に近現代史センターが設けられた後、カリモフが議長を務める大臣会議が1998年6月27日付けで出した決議 (Khanat Ministrov 1998) によってソ連時代からある科学アカデミー付属の歴史研究所を改組し、「ウズベク国民とその国家の歴史とウズベク民族の形成に関する研究成果の集成」をその課題の一つに掲げた。筆者は1998年9月近現代史センターを訪問し、同センターの研究員よりそこでの活動について説明を受けたが、それによれば、このセンターの目標の一つはソ連時代の「誤った」イデオロギーを払拭した新しいウズベキスタンの歴史シリーズを出版することであるのだが、今のところいつ出版に漕ぎ着けるかわからない状況だとのことであった。また、歴史研究所も改組されたばかりで本格的な活動はまだこれからである。こうした新しいイデオロギー形成までの空白を「古い家」で賄っているのが現状なのである。

容易に予想されるように、西側研究者のウズベク民族の起源に関する見解は全く対照的なものである。ソ連崩壊直前に「近代ウズベク民族」を著したE. オールワース (Allworth 1990) によれば、「ウズベク」という語の起源説には、14世紀に活躍した金帳ハーン国 (チンギス・ハーンの息子ジユチの子孫がつくった遊牧国家で、

ロシアを支配下に置いた。「ジユチのウルス」とも言う)のウズベク・ハーン(在位1312—1341)に発するとするものと、「ウズベク」という語自体がチュルク系言語において「自らを主人と為す者」という民族の誇りを強調した意味を持つことに着目したものの2つがある。

ウズベク・ハーンの活躍は、当時の周辺異民族の歴史家の注目が大いに引いたようである。当時のペルシャ語文献においては、彼の国家は「オズベキスタン」あるいは「ウルシ・オズベク」(ともに「ウズベクの国」の意)として言及されている。この頃、ウズベクは金帳ハーン国を構成するモンゴル・チュルク系部族連合の一翼を担う部族であったと推定されている。しかし、ウズベク・ハーンの没後、この部族はしばらく歴史の舞台から姿を消し、再びその姿を現したのは1360—80年代の西シベリアであった。この時期、彼らは現在のチュメニであるトゥラを本拠として独立国家を築いていたが、これは先のウズベク・ハーンの時代の政治的中心であるヴォルガ沿いのサライから1600キロ離れた土地であった。ウズベク・ハーンに起源を求める研究者はウズベクたちは歴史の空白の20年間にこの1600キロを移住したのだと考えるのに対して、それを疑問視する研究者は「自らを主人と為す者」説を採る。

14世紀末から15世紀前半にかけて(今日のウズベキスタンの土地ではティムール朝が全盛を迎えていた頃)、遊牧ウズベク族はシベリアに拠点を置き、キプチャク草原東部(今日のカザフスタン中東部)において支配権を握れないまま、何度かホレズム地方に侵入

しそこを短期間ながら支配することに成功している。この地は、後に彼らが今日のウズベキスタンの地に進出する際の足掛かりの一つとなる。

15世紀半ば、アブル・ハイル・ハーンの時代、ウズベク族は内紛により大別して3つのグループに別れる。分裂の原因は、アブル・ハイル・ハーンがあまりに厳格な統治を行ったため彼から離反する集団が出たことであつた。アブル・ハイル・ハーン自身のグループは南下して、シルタリヤ沿いのシグナク(現カザフ領。クジル・オルダとトゥルケスタンの中間地点であつたと思われる)に新たな根拠を定めた。これに対してトゥラに残留した者たちは、シビル・ハーン国と呼ばれる新しい国家を建てて、次の世紀にはコサックを尖兵とするロシアに滅ぼされてしまう。また、アブル・ハイル・ハーンの重臣たちの一部は長年対立してきたモゴリスタン(カザフ東部の遊牧勢力)に寝返り、やがて今日のカザフ族の原形を形作るようになる。

シグナクを根拠とした遊牧ウズベク族は1468年にアブル・ハイル・ハーンが亡くなることによる影響も加わって一時的に弱体化するが、15世紀末にシヤイバニ・ハーンが登場することによって勢力を取り戻し、16世紀初頭にはティムール朝末期の混乱に乗じて、今日のウズベキスタン(及びアフガニスタン北部)に進出してくるのである。

これがウズベク族がこの地に本格的に進出した最初の波であり、シヤイバニ・ハーンの系統は後にブハラを首都とするブハラ・アミ

ール国を形成し、支配部族の交替を見ながらも20世紀初頭に至るのである。また、ウズベクの別の部族からは、ヒヴァ、コーカンドを支配する者も現れ、16世紀以降のウズベキスタンは政治的には文字通り「ウズベクの国」となっていく。

つまり、西側研究者の見解に依拠するならば、「ウズベク」という名称を問題にする限り、ウズベク人の歴史はたかだか16世紀以降の期間に過ぎないことになる。常識的に言えば、ソ連の研究者の見解は全くイデオロギーの産物であり、非科学的な代物に過ぎないと思える。それ自体は正しいが、問題はそこで終わるのではない。なぜなら、1938年以降、旧ソ連のイデオログたちによって作り上げられた公式見解は、既に述べたような空白のために当分は独立ウズベキスタンの公式見解でもあり続けるだろうし、現在これに対抗するような見解は存在しないからである。

この点に関して文化人類学の立場から考えるならば、むしろソ連の研究者の立場を尊重しなくてはいけないことになる。なぜなら、それはある程度までウズベク人たち自身の見解だからである。周知のように、文化人類学の民族理論は近年、人種や言語・宗教といった客観的な基準ではなく、そこに住む住民たちの「われわれ意識」を決め手と見なす傾向にある。文化人類学者は、住民たちがこれが「ウズベク」だという見解を無視することができないのである。しかし、そうになると、人種やある歴史的時点における居住地域などの「客観的」基準によって定められた民族を主観的な意識であると見なすという何がしか奇妙な事態が生まれることになる。

だが、そもそもウズベク人自身は公式見解を全面的に受け入れていると言つてよいのだろうか。そうではないことを示す要因として、タジク人との関係と氏族(クラン)の2点を挙げることができる。

今日のウズベク人とタジク人の関係は複雑である。国境線確定以前の段階では、(遊牧民ではない)定住ウズベク人もタジク人も等しく「サルト」という共通の名称で呼ばれ、単に話す言語が異なるというだけで、生活圈から言つても文化・習慣から見ても殆ど異なることがなかった。現在でも、サマルカンドやブハラなど伝統的にタジク人の多い地域では住民の8割ほどが両方の言語を解するとも言われている。ブハラ・アミール国の時代にはサマルカンド・ブハラ地域とタジキスタン東部は同じ国の領土であったが、国境線確定により両地域は2つの国家に属することになった。現時点で最新ののものである1989年の公式統計ではタジク人はウズベキスタンの総人口の4.7%を占めるとされているが、実際には公式的な民族的所屬がウズベクでありながら自らの意識の上ではタジク人であると考えている「潜在的タジク人」が数百万規模で存在するという非公式的な見解もある。これに関して、タジキスタン側の研究者マソフ(Masov 1991, 1996)はサマルカンド・ブハラ地域をタジク人の「未回収の土地」とし、国境線確定の理不尽さを訴えている。また、タジキスタン国内にも大きな問題がある。タジキスタンの国境線確定に関して、フジヤンドを中心とするレニナバード州はウズベク人多数地域でありながらタジク領とされたが、その地が山地の多い同国にあつて唯一平野地域であることから先進的な工業地域となること

によってウズベク系がタジキスタン経済をコントロールするという結果を生んだ。このような在外ウズベク人は、カザフ、キルギス、アフガンなどの各国にも存在するが、多くの場合その国とウズベキスタンとの国際関係の軋轢の要因となっている。

だが、ウズベキスタンが抱える民族的な不明瞭さは外に向かってばかりではなく、内に向かつても観察することができる。それは一般に「クラン」の影響力の強さという形で表現される。ここで「クラン」というのは、文化人類学でいうような明確な定義をもつものというよりは、各地域の政治・経済的な実権を握るいくつかの親族を漠然と指す言葉として使われている。だから、「クラン」というよりもよく使われる別の言葉である「地域主義」という用語を使った方が適切であるように思われる。

トロフィーモフの研究 (Trofimov 1994) によれば、そのような「地域」は数え方によって3つとも6つとも9つとも言える。最も基本的な分類である三分法では、ホレズム地方、ウズベキスタン中部、フェルガナ地方と分けられる。このうち、中央部をさらにタシケント、サマルカンド、ブハラ、スルハンダリヤ・カシユカタリヤの各地方に分けると六分法になる。九分法では、フェルガナ地方をナマンガン、アンディジャン、フェルガナ(州)の3つに分け、サマルカンドからジザクを独立させるという考え方を採る。

いずれにせよ、ウズベク国内社会は現在13ある行政的地域と大して変わらない数の内部的な単位に分かれていると言える。それはタジキスタンのように国を分裂させるほど深刻ではないが、国家の

意思を一つに統一するほどでもない。

3. ポストソ連社会としてのウズベキスタン… 「民族」の政治への影響

ポストソ連社会は、ソ連時代には考えられなかった民族問題が各地で噴出し、それがこの地域の混乱の一要素を成していると思われる。表面的に見れば、(独立前後にはキルギス人との衝突やメスヘチャ・トルコ人に対する襲撃など比較的小規模な民族対立は見られたものの)現在のウズベキスタンはそうした深刻な民族問題の混乱からは免れているかのようなのである。だが、ここまで述べてきたことからある程度わかるように、ウズベキスタン国家の正当性はいまだ確固たるものとなっていない。カリモフ大統領はそれを敏感に察知して、自らの代表作でウズベキスタンの安全保障に関する教科書となっている「21世紀を目前にしたウズベキスタン」(Karimov 1997)で同国の安全保障を脅かす数々の要因の中に民族対立や地域主義を挙げている。

ウズベキスタンの中央アジア地域における政治的目標は、同国を中心とした地域的統合を図ることである。ウズベキスタンは中央アジアの戦略的中心であるとよく言われるが、それは単に純粹に政治的なものばかりではない。そこでは文化は政治的な正当性の重要な根拠の一つとなる (Petrova 1998)。今日のウズベキスタンの領土に

は中央アジアの歴史的遺産が集中しており、他の4国には極めて乏しい。また、ウズベクの各都市の遺産はユネスコによって世界的な文明遺産として認められている。この論文の前半において既に、ウズベク民族イデオロギーが「サルト」的な伝統をより重視することによって遊牧的な伝統から離れたことを指摘した。中央アジア地域の文脈ではウズベキスタンにとって、この民族イデオロギーは歴史の豊かさ結び付いて、(カザフ、キルギス、トルクメンの3国に対してはその国々の歴史の貧しさを暗に示すこと)によって、タジキスタンに対してはそこから歴史を奪い去ることによって)この地域におけるウズベキスタンの優位性を築くための武器となる。だが、それは4ヶ国の反発を招き、ウズベクスタンの意図とは裏腹に地域的統合の不安材料となっている。

また、ウズベク国内の状況に目を向けてみれば、ウズベキスタンを含む中央アジアの政治は時に「氏族政治」であると言われてきた。1959年から1983年まで20年以上にわたってウズベク共産党第一書記として国を統治したシヤラフ・ラシドフはその典型と言えるだろう (Vaisman 1995)。1925年以来、党第一書記や最高会議議長といった共和国の要職はフェルガナかサマルカンドの出身の者が務めることが多かった。スターリンのお気に入りだったウスマン・ユスーポフ(党第一書記在任…1937-1950)がフェルガナの出身ならば、フルシチョフに見出されブレジネフ時代を生き延びたラシドフは当時はサマルカンドに属したジザクの出身だった(ラシドフは1973年、ジザクをサマルカンド州から切り離し

独立の一州とした)。ラシドフは共和国の党や政府の要職の多くを家族や親族、同郷の者に分け与えた。なぜならば、中央アジアの社会では地縁血縁で結び付いた者たちが最も信頼がおけるからである。また、1970年にホレズム出身のマツチャノフを最高会議議長に任命した時のように、別の地域の出身の者に地位を与える時はその地域勢力との戦略的な連合を意図していた。

現在のカリモフ政権はラシドフ政権に比べれば、表面的には氏族政治の色彩は比較的薄いように見える。カザフスタンの新聞が最近明らかにしたところによれば (Karavan 1993)、カリモフはサマルカンドの旧市街に生まれ赤貧の幼少期を送ったとされている。彼の父親は早く亡くなり、母親と二人の生活には氏族の後ろ盾など全く存在しなかった。現在、彼の政権にはやはりサマルカンドやフェルガナの地域的利害を代表する人物が高職に就いているが、同時に彼はそれと併存する形で航空機工場時代やカシユカグリヤ党第一書記時代に築いた人脈を起用し、非常にイデオロギー色の強い政治を志向している。

ウズベク国家の成り立ちを考える際重要なのは、ソ連時代に形成され今日も残存するイデオロギー的な国家の枠組と地縁・血縁などの小規模な集団を基礎とする地域主義的な枠組が平行して存在することである。ウズベキスタンという国家を維持するためにはイデオロギーが依然有効だが、国家維持の目的が確保されればその範囲で地域主義が力をもつ(時にはその範囲を逸脱しようとする)。イデオロギーと地域主義は市場経済への移行という関心からは両方とも否

定的な要因としか思えないが、ともにウズベキスタンの現状を支える大きな力なのである。

経済の領域で政治の領域の地域主義に対応するのは、袴田茂樹のいう「バザール経済」(袴田 1993)である。彼のいう公式的な表層とは全く異なったソ連経済の実態は、ウズベキスタンについても当てはまる。そしてウズベキスタンでは、公式的な(あるいは外から見た)ソ連経済が社会主義のイデオロギーに対応するとすれば、バザール経済が地域主義に相当するのである。なぜならば、この両者に共通する特徴として、自らに近い、あるいは結び付きの強い人間しか信用しないという限定性が見られるからである。

ただ、地域主義とバザール経済に対するウズベク政府の態度には、大きな違いがある。バザール経済は、経済的自由の名のもとある程度容認されており、個人や集団の才覚によって規模は小さいながら商業的な成功を収めることは可能である。しかし、地域主義を容認すれば現在ある国家の枠組を崩すことになるため(トロフィーエフはウズベキスタンが3つに分裂する可能性も示唆している)、それは国家的安全保障上の脅威になりうるのである。それに歯止めをかけるための政策の一つが、ウズベク民族イデオロギーの強調なのである。それは既に見たように必ずしも科学的でもなければ、また独立後に新たに作り出されたわけではない。

中央アジア諸国は、他の旧ソ連諸国同様、ソ連崩壊によって市場経済・民主主義への道を歩み始めたことされる。また、そうした前提に立って、1998年のロシアの金融危機の際もロシアの改革は挫

折したというような言い方も為された。しかし、社会の実態(のかかりの部分)から見れば、旧ソ連社会は対して変わっておらず、ウズベキスタンについて言えばこれらの社会の中でも最も旧時代からの継続性が高い。われわれがポストソ連社会を考察する際、重要なのはそれが市場経済・民主主義といった新しい方向性に踏み出しているかという点よりも、むしろ社会主義の公式イデオロギーに隠れて見えなかった旧時代の状態がどんなものであったのかをまず把握することが重要であろう。

引用文献

- Allworth, Edward A.
1990 The Modern Uzbeks, Stanford, California: Hoover Institution Press.
Kabinet Minister
1998 Postanovlenie Kabineta Ministrov Respubliki Uzbekistan o sovetshestvovaniu deyatel'nosti Instituta istorii Akademii nauk Respubliki Uzbekistan, (in: Pravda Vostoka, Jun.28, 1998)
Karavan
1998 Uzbekskii Petr Peryi, Oct.10, p.15.
Karimov, Islam
1996 Uzbekistan: natsional' naya nezavisimost', ekonomika, politika, ideologiya, Tashkent: "Uzbekistan".
1997 Uzbekistan on the Threshold of the Twenty-first Century, Surry(GB):Curzon Press.

1998 Po puti bezopasnosti i stabil' nogo razvitiya, Tashkent:
"Uzbekistan".

梶田茂樹

1993 ロシアのシムンツ 深層の社会学 東京：筑摩書房

Masov

1991 Istoriya topornogo razdeleniya, Dushanbe: Irfon.

1995 Tadzhihi: istoriya c grifom "sovershenno sekretno", Dushanbe:

Tsentr isdaniya kul'turnaogo naslediya.

Petrova, S.N.

1998 Kul' turno-istoricheskoe nasledie kak resurs vneshnei politiki

Respubliki Uzbekistan, (in: Vostok no.3, 1998, Moskva :Nauka).

Trofimov, Dmitrii

1994 Tsentral'naya Aziya : problemy etno-konfessional'nogo razvitiya,

Moskva: Moskovskii gosudarstvennyi institut mezhdunarodnykh

otnosheniya.

Vaisman, Demian

1995 Regionalism and Clan Royalty in the Political Life of

Uzbekistan, (in : Yaacov Ro'ied.), Muslim Eurasia: Conflicting

Legacies, Ilford, England/Portland, Oregon: Frank Cass.

Vakhobov, M.

1961 Formirovanie uzbekskoi sotsialisticheskoi natsii, Tashkent:

Gosudarstvennoe izdatel'stvo uzbekskoi SSR.

Yakubovskii, A.Y.

1941 K voprosu ob etnogeneze uzbekskogo naroda, Tashkent:

Izdatel'stvo UzFon.

The Uzbek Nation and a Post-soviet Society

Iwane TAKAHASHI

The main subject of this thesis is how the Uzbek nationalist ideology and regionalism within the country influence politics and economy of Uzbekistan. In the first section, political boundaries and ethnic compositions before and after division of Central Asia in 1924 are briefly reviewed. In the second section, characteristics of Uzbek nationalist ideology are examined by comparing it to the study of E. Allworth on modern Uzbek nationality and also referring to regionalism inside the country. And finally in the third section, it is argued that both ideology and regionalism give some characteristics to Uzbek politics and economy.

Key words

Uzbek nationalist ideology, Sart, regionalism, history, nomadic Uzbeks